

編集後記：明治時代に三陸沿岸で大津波があり、2万人以上が亡くなったことは、多くの人が知っていたと思います。津波の高さ（遡上高）が場所によっては30mを超えたこと、同じような巨大津波がいずれは再来するというのも、知識としては分かっていたはずですが。その一方、明治時代の災害は防災体制や情報・通信が未発達だったころの出来事であり、今ならこんな被害は起きないだろうという漠然とした感覚もあったように思えます。東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）の惨禍は、こうした幻想を打ち砕くものでした。防災に密接に関係する日本気象学会の機関誌「天気」編集委員会を代表して、被災した皆さまに心からお見舞い申し上げます。

気象の世界でも、多数の犠牲者を出す災害が繰り返されてきました。「天気」が創刊された1954年には洞爺丸台風が来襲し、以後1950年代末にかけて諫早豪雨や狩野川台風、そして伊勢湾台風の災害が起きています。その後、河川の改修や堤防の建設が進み、予報精

度も格段に向上したことにより、気象災害の犠牲者は大きく減りました。しかし、災害の規模が防災施設・体制整備時の想定を大きく上回り、施設・体制がひとたび破られると想像を超える被害が出ることを今回の震災が教えています。

今回の震災から学ぶべき教訓はたくさんありますが、その1つは過去に災害をもたらした現象に再度目を向け、それと同様の、あるいはそれを上回るものが将来あるかも知れないという認識を持つことではないでしょうか。これまでの「天気」には、気象災害を引き起こした現象に関するさまざまな観点からの研究成果が掲載されています。また、最近の気象災害に対する研究成果を後世への記録として残しておくことも、いずれ起きるかも知れない巨大災害を防ぐ上で役立つと思います。そのことを意識しながら編集に当たってまいりますので、会員の皆様も研究の成果を積極的に発信して下さいよう、引き続きよろしくお願い致します。
(藤部文昭)